

# 国際シンポジウムエクスカージョン報告

高橋敬子

2017年11月11日・12日に開催した国際シンポジウム「ESDによる地域創生の可能性と今後の展開-Prospect and Ongoing Challenges of Regional Revitalization Based on ESD-」終了後（11月13日～14日）、シンポジウム登壇者を対象に実施したエクスカージョンの内容について報告します。

## エクスカージョンの概要

本エクスカージョンは、ESDによる地域創生の先進事例の現場で地元の方々から話を聞き、各々の取り組みについて意見交換することで、その課題や今後のあり方について学び合うことを目標に実施しました。

主な訪問地は、ESD先進自治体である宮城県気仙沼市と、立教大学が震災復興支援協定を結んでいる岩手県陸前高田市の以下の機関です。

〔1日目〕気仙沼市教育委員会、気仙沼市立面瀬小学校、一般社団法人まるオフィス

〔2日目〕陸前高田市役所、八木澤商店

## 1日目の内容

気仙沼市では、幼稚園から高校までの成長段階を踏まえた系統的な学習や、縦横の学校間連携、地域との連携システムの構築、ESDの連携や学びを広めるための気仙沼ESD円卓会議等の取り組みが2002年から継続して実施されてきました。この先進的な取り組みが世界でも認められ、2005年に国連大学から仙台広域圏RCE（ESDの地域拠点）を構成する拠点の一つとして認定されました。同市では、漁師が山に植林をして海を保全する活動「森は海の恋人」や「スローフード都市宣言」等、豊かな自然環境を保持し、かつ豊かな地域資源を利用したさまざまな取り組みが行われてきました。2011年の震災によってその状況が一変した中、「海と生きる」ための持続可能なまちづくりを市として目指していくこと、またそれには人材育成が必要であることを再認識したそうです。初期の同市のESDは、総合的な学習としての地域学習、環境教育、国際理解教育、自然体験活動、食育、防災教育、養殖体験が実施されてきましたが、震災後は、学校教育の仕立て直し、地域連携、地域貢献、人材育成、能力向上がESDのテーマになり、震災後のまちづくりと連動した地域探求学習、海洋教育、減災教育等が実施されるようになったそうです。

気仙沼市面瀬地区は、学校の校庭に仮設住宅が建設される等、外で子どもたちが遊べる場所が少なく、安全に、自由に遊べる場所が欲しいという意見から、「面瀬川ふれあい農園」がつけられました。気仙沼市のESDをけん引してきた面瀬小学校では、学年PTA行事として実施してきた「親子カレーライスづくり」を環境・海洋教育の視点から見直して、「気仙沼らしい夏野菜のカレーづくり」を実施した話を伺いました。野菜の作り方は地元の人からアドバイスをもらい、漁業者の方と連携して、使わない海藻（ワ



気仙沼市立面瀬小学校でのお話

カメ）を肥料に入れる（里海循環型農業）方法を取り入れました。夏休みには保護者にも草取り等、農園の管理に協力してもらい野菜を育てたそうです。この活動のために、他の教育・研究機関の先生を呼んだ授業も行いました。数か月かけて完成したのは、気仙沼で獲れるメカジキ（企業から提供）を使った「メカカレー（夏野菜+メカジキ）」。

地域にあるさまざまな資源の存在に気付くだけではなく、それを活動の中で利用する、味わってみる等の体験をすることによって、地域資源の理解や地域への愛着がより深まっていくだろうと感じました。また、これらの活動にさまざまな外部の方が関わることにより、学びの質も高まったのではないかと思います。そして、保護者がこれらの取り組みを理解し、応援し、継続的に関わることで、子どもたちのやる気の向上や、家庭内でのコミュニケーションの促進にもつながる試みだと感じました。

一般社団法人まるオフィスは、気仙沼に関わる若者の活動人口を増やすことを目的に事業を展開しています。代表の加藤氏は兵庫県出身で、震災を機に気仙沼に移住したそうです。震災以降、海に一度も入ったことがないという地元高校生や、30年後には気仙沼から漁師はいなくなってしまうのではないかと地元漁師の声を聞き、危機感を抱いたそうです。また、同地区では子どもの数の減少に伴い、地域の子どもの向けサービスが減り、学校以外で子どもたちが地元への愛着を持てる機会がなくなることが懸念されていました。このような状況の中、子どもたちに気仙沼のかわいい大人の背中を見せることで、「いきぬく力」を身につけてもらいたいと考え、地元まるまるゼミ（以下、まるゼミ）を始めたそうです。いきぬく力とは、「生き抜く力」と、「息を抜く力」の二つの意味で、息を抜きながらはた

らき、くらしている気仙沼の人たちのもつ魅力のことをいうそうです。唐桑半島で主に一次産業を営んでいる漁師や農家の方々に先生になってもらい、中高生にその弟子として仕事や生活を体験してもらい、というまるゼミでは、地域ぐるみで力を合わせて子どもたちを育て、地元愛を育む「地域協育」の仕組みづくりも目指しているそうです。地域の産業を体験した子どもたちが、地域に帰ってきたい、あるいは外から気仙沼を応援してくれるようになるために、「地域自身も魅力を持たなければいけない」という加藤氏の言葉が印象に残りました。まるゼミの活動は、子どもたちだけではなく教える立場の地元の方たちにとっても、地域への愛着を育む場になっていると感じました。

## 2日目の内容

陸前高田市役所では、東日本大震災からの復興に向けて策定された、陸前高田市まちなか再生計画の話の伺いしました。その後、防潮堤の復旧工事や、高田松原の再生事業の現場を見学しました。最後に、八木澤商店（創業200年を超える醤油・味噌醸造の地元老舗会社）会長の河野和義氏より震災からの復興の軌跡を伺いました。

陸前高田市の復興計画では、防潮堤や水門など海岸保全施設の再整備による津波対策と防災対策や避難対策を合わせた複合的な対策によって、「いのちを守るまちづくり」を最優先にし、子どもたちから高齢者まで、誰もが安全と安心を実感できる多重防災型のまちづくりを計画の基本にしています。私たちが訪れたときも、砂浜・防潮林の再生、防潮堤の復旧工事、防災メモリアル公園の設置等、ハード面での大規模事業が急ピッチで進められていました。平成26年度からマツ植栽のための盛土等が始まり、平成29年の4月ようやく植栽が始まったそうです。震災前と同じような松原が見られるまでには、約50年かかると言われています。震災以降、陸前高田市にボランティアとして来てくれた方は延べ17万人。陸前高田の魅力を発信して、陸前高田を思ってくれるファンを増やし、交流人口を増やすことを考えた取組（陸前高田思民構想）も行われているそうです。

八木澤商店で作られる本醸造の醤油は、農林水産大臣賞にも選ばれるほどの品質でした。アミノ酸やアルコール等が添加された醤油が多く出回っている中、岩手県産の大豆を使い、昔ながらの製法でもろみを2年間熟成させてでき



マツの植栽が始まった陸前高田市の高田松原

た醤油はとても貴重です。しかし、震災による津波の被害で、200年もの間醤油を作り続けてきた土蔵や製造工場は全壊、流出してしまいました。そのような状況の中、河野氏は息子の通洋氏に社長職を受け渡し、親子、そして従業員の方たちとともに本物の醤油づくりに向けて動き出したそうです。40人いた従業員を誰一人解雇せず、内定を出していた新入社員2名も迎え入れました。最初は仕事もなく、ボランティア活動や、同業5社の商品を売って商売をしていたそうです。

河野氏は、当時「自分さえ変われば明るい未来がくる」と信じ、どんなにつらくとも無理をして笑っていたそうです。奇跡的にも、震災前に作っていたもろみが見つかったのは、同年4月6日。がれきの中でもろみを見つけたときは、飛び上がって、泣いたそうです。7億円をかけて新工場を一閃に建設し、2013年春、待ちに待った醤油の仕込みが始まりました。そして2014年の秋に、奇跡のもろみを2年間熟成させてできた「奇跡の醬（ひしお）」が完成しました。

河野氏は、震災以降、本当に多くの人たちに助けられ、人のつながりが最高の財産であること、お互いに話し合っ、手を取り合っ、きずなになっていくんだということを感じたそうです。「文明の利器はお金で買えるけど、文化や伝統は買うことができない。それでも、大事にしたら変えていくことはできる。復興復興というけれど、インフラの整備だけが復興ではない。人が戻って、安心して暮らせることが復興なんだ。」河野氏の重みのあるこの言葉は、今でも私の心に残っています。

震災という過酷な状況の中で立ち直る力とは「人と人との心からのつながり」から生まれるのであって、そのつながりがあれば、どれほど過酷な状況であっても、人は奇跡を起こす力を生みだせるのだらうと感じました。人が生きていくうえで何が本当に大切なのか、それをじっくりと向き合っ考えることのできたエクスカッションとなりました。



八木澤商店の河野和義氏のお話（陸前高田グローバルキャンパスにて）

高橋敬子（たかはし・けいこ）立教大学社会学部/ESD研究所 教育・研究コーディネイター、NPO風土-Kazetsuchi代表、としまちプロジェクト運営協議会副会長。2006年より豊島区西池袋でまちづくり活動を行う。2014年より国内外で気候変動教育の研究・プログラム開発等も行う。